

愛知黎明高校の実践の一端が『教育』誌4月号に掲載 しかも2本！

教育科学研究会の機関誌として戦前から発行されている『教育』4月号に本校の教育実践論文が2本掲載されました。私が記憶する限り、同じ号に同じ学校の実践が2本載ったのは初めてではないかと思えます。

<特集1 学校を楽しく、おもしろく>

栗山リンダ＋牛島慶子「高校は私の世界を広げてくれた一笑あり、涙あり、学びあり」

<特集2 書いてみませんか、学級通信>

谷侑香里「生徒との関係づくりが、保護者との関係づくりへ」

栗山リンダさんは本校に入学して悩んでいたことを担任の牛島先生に相談し、その時出会った高校生フェスティバルの生徒達と話す中で「見知らぬ誰かのため、自分たちの未来のために行動している高校生が世の中にいるんだ、私はなんてちっぽけなことで悩んでいたんだろう」と感じ、募金活動や地域活動に参加していく成長の過程を具体的に綴っています。

牛島先生は「さまざまな人と出会い協働し、探究する」と題する部分で、「高校生フェスに行ったことは、ほんのきっかけにすぎない。そこで出会った人や、現地の生に触れたことで、さらに学びたくなったことは、リンダ自身の探究心である。」としたうえで、本校の探究学習を以下の様に整理しています。

「愛知黎明高校の探究学習は、自分の未来と対話し、異質な人々と協働し、明日を探究し、問題を解決していく力を育てることを目標にしている。次に何かに挑戦したい！ という彼女の気持ちに、徹底的に寄り添う教員がいた。そこには、黎明の探究学習の学びが生きている。」

谷先生は3年間毎日出し続けた手書きの学級通信『蜜柑』をもとに、「書いてよかった」と感じることを三つ紹介しています。

1. 自分自身が積極的に生徒とかかわることができたこと
2. 生徒たちも毎日の通信を楽しみにするようになり、クラスの一人ひとりを認め合うための道具になっていったこと
3. 保護者とのつながりができたということ

「先生、書き終わるまで帰らずに待つから書いてきて」とせがむ生徒。「うちの子は持って帰ってこないから、〇〇君のお母さんに毎日写真で送ってもらってるんです」と言う保護者の声(これには私はびっくりしました！こんな手を使ってでも読もうとする親さんて素敵ですね)から、学級通信が保護者と手を携えて生徒を育てたいという谷先生の思いが生徒にも保護者にも受けとめられていることを読みとれます。

牛島先生も谷先生も、愛知黎明高校には学級通信を出している教員がたくさんいること、父母提携が盛んなことを紹介しており、お二人の実践が教員仲間との同僚性に支えられていることを記しています。

生徒アンケートでは「本校に入学して良かった」の割合が低くなり、施設・設備の劣悪さが一因であることも指摘されています。

しかし、私は思うのです。「ぼろは着てても 心は錦」どんな学校にも負けない教育実践が愛知黎明高校にはあると。

新年度をこんな気持ちで迎えたいと思います。